WASON
HQ
1104
J94+
J74

THE WOMAN'S MAGAZINE.

Mr. 10
1888
No. 100

明治二十一年三月八日印刷
明治二十一年三月十日出版

女學雜誌

每土曜日發兌
一冊正價五錢
府內無郵送稅

第百號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 100 MARCH 10th, 1888.

第百號

EDITORIAL: — Family Life in Japan: No. V. (How to Make Homes Happy — II).

LEADING ARTICLES: — Baby studied from Psychical Point, by Prof. S. Sakaki.

CRITICAL NOTICES: — "Ukigumo" (The Floating Cloud); "Miyama No Himeyuri" (Dora Thorn); Buddhist Ladies Magazine". "Woman's Magazine" and "Iratsume".

MISCELLANIES: — Prohibitional Petition by W. C. T. U; Your Mission; Life or Death; Nightly Conversations on the Hundred Odes by a Hundred Poets: No. 1; Women's Costume in Japan (History of "Kimono" and "Obi").

NOVELS: — Bouquet of Novels; No. 1. — Scott's Kenilworth.

BIOGRAPHIES: — Harriet Beechers Stowe.

CORRESPONDENCES.

CHILDREN'S COLUMN: — Emperor's New Cloth.

GENERAL NEWS.

●社説　日本の家族第五（之を幸福にするの策）

●論説　小兒の精神及保護法（榊俶）

●批評　浮雲○谷間の姫百合○婦人敎會雜誌○結婚の枝折○いらつめと女學雜誌

●叢話　萬國婦人禁酒會員の請願書○御身の務○生死○百人一首一夕話（鈴木弘恭）○古ばなし（髙橋愚）

●小說　小說神髓蘇格氏ケチルチルス第五回

●佳傳　ビーチエル　ストウエ

●寄書

●新報

小供のはなし

不思議の新衣服

●珊瑚の珠

題半身美人　六如居士

誰將妙筆寫風流。寫到風流處便休。記得昔年曾識面。桃花深處短墻頭。

盤中詩　漢　蘇伯玉妻

山樹高。鳥鳴悲。泉水深。鯉魚肥。空倉雀。常苦飢。吏人婦。會夫希。出門望。見白衣。謂當是。而更非。還入門。中心悲。北上堂。西入階。急機絞。杼聲催。長歎息。當語誰。君有行。妾念之。出有日。還無期。結巾帶。長相思。君忘妾。未知之。妾忘君。罪當治。妾有行。宜知之。黄者金。白者玉。高者山。下者谷。姓者蘇。字伯玉。人才多。知謀足。家居長安。身在蜀。何惜馬蹄歸不數。羊肉千斤酒百斛。令君馬肥麥與粟。今時人。知四足。與其書不能讀。當從中央周四角。

題しらず　よみ人しらず

よの中はいづれかさしてわかならむ行とまるをぞ宿と定る

同　同

ちゞの色にうつろふらめど知なくに心し秋の紅葉ならねバ

車遙々篇　晉　傅元

車遙々兮馬洋々。追思君兮不可忘。君安遊兮西入秦。願爲影兮隨君身。君在陰兮影不見。君依光兮妾所願。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百號　明治二十一年三月十日發兌

社説

○日本の家族

（第五）之を幸福にするの策（下）

右に數え擧げたる條々は只管ら實地直接の方法を先きにし專はら家族銘々の心得次第によりて直接無雜作に行はれ得べき者を撰びたり故に人々もし云ふ所の如くに覺悟して能く其獨りを愼しみ共に忍び互ひに正直にして成るべく相ひ信じ相い思ふの處置を爲すときは何如なる不和合の家族と雖も遂に和樂圓滿せざるはあらじ日本の到る處に乍まちにして幸福なるホームを見るの運びとあらんとは當に指ざして之を待べきもの也。然るに倘密かに考ふる所によれば凡そ方今日本の家族を不幸にする所の元因中には素と一朝一夕に起れるにあらず其遠く我國の習慣族制の宜きを得ざるに由て生じ來たれるものもあれば今ま之が改良の策を施すに當ては亦た計を遠きに立てゝ只管らに其根底より之れを改たむるの處置を爲さゞる可からず。

熟ら思ふに今の如く親子永久に同居し一家に二夫婦以上の合

宿を許すは先づ家族不和合の一大元因たり之れ第一に改めざるべからず凡そ矍鑠たる老夫婦ありて髮白く腰曲り乍らに一族の惣長と爲り下には當代の主人の父母尙ほ兩人とも極めて達者にして新聞を讀むに目鏡を用ひず主人夫婦は今年三十前後にして子供數人あり而して主人の妹は事故ありて此頃子を連れて歸り其弟にも亦た來年は妻を迎ふるの計畫ありと云ふ族人悠々一家團欒眞哉康哉其美しき事は孔子の爲めに賞められ詩經の材料に用ひらるゝ程の者あらんか眞に結搆至極の事ありと雖とも恨らくは如此きは是れ華胥の國か天國か堯舜黃金の時代にあらずんば絕てあるまじき所のもの也其の實際を窺へば外面は何如程に立派ありとも內面に火車の輪轉せざるは甚はだ稀れなり好し假令ひ幸ひにして火車の輪轉せざるあるも茲に和樂爽快なる樂泉の混々として湧き出づるとは斷じてあるべからざるもの也。蓋し夫婦の愛情は多く愚らしき戯れの中に胚胎し他人より見るときは恰も是れ六才の童男童女が相ひ逆らひ合ふかと奇しまるゝの間に反つて無限言ふべからざるの愉快を存するものなり故にもし此の夫婦兩人差向ひにて一家を持つときは終日遠慮なく相戯れて常に奧底なく喜び合ひ以てます〳〵其愛情を深ふするの好運あらん是れ即ち幸福ある家族を作るの根底にして之より一子を擧ぐれば一樂を增し一女を得れば亦た一愉快を加えて凡そ面倒の出で來る每に即はち亦其の親密の交情の益す信切と爲るべきもの也、然るに一家に親子同居し二夫婦以上合宿して朝夕の寐起万端をお互に暴け出さん時には何如に氣輕なる老夫婦と雖ども其息子若しくは孫息子等の面前に於て目鏡越しに相見合ひてシャレを言ひ合ふとは出來まじ亦其息子の夫婦に於ては新婚の愉快魂ひ有頂に登りあるとも嚴たる父母の手前何とあく裏はづかしき氣味して萬事を扣へ目にし時には溢るゝ所の愛情を壓へて特更に妻を叱つて見するが如き奇談なきにあらず笑止千萬の異態ありと雖ども凡そ親子同居數偶合宿の家に於ては如此きの出來事は實に勢ひの免かれがたきに起るものなり。特に天保と文久と固より同一に參らず文久と當今とは既に廿餘年の相違あるが故に凡そ時代を異にし感じを異にし教育習慣を異にしたる古今老少の人間相ひ同居して其間に矛盾する所ろあらざるの理なし若し矛盾せずんば寧ろ之を奇しむべし彼等が互ひに萬事に反對して共に不快を感じ則はち最初陰に不平を懷き遂には陽に不和合の喧嘩とならざると蓋し稀なるべし故に吾人は固より親子同居して一家永久に和樂するの愉快

（三）

を希がはざるものにあらずと雖ども若し既に實際に於て此の愉快を得べからずとせば寧ろ速かに族制を改ためて親子別居の新習慣を作り凡そ其子の妻を娶りたる以降は親子各住居を別ち一家に二夫婦以上の同居せざるように致したきもの也」

但し親子別居の論殆んど人情を忍に似て今の老人儒者等が尤も嫌惡する所ならん歟然れども之を聞ときは或いは人情を忍ぶに似て之を實際に考ふるときは則はち是れ尤とも人情を重んずるの妙方たるを知らん大凡そ親の心を安んずるを以て子の孝となし子に樂みを與ふるを以て親の慈愛となす然るに今ま躮に嫁の出來たる后ち此の新夫婦をして互ひに自由に和樂せしむる所なきは慈愛なる親の情に於て忍びざる所あり亦己れは血肉の實子なりと雖ども嫁は他家の他人なるが故に老躰の父母をして朝夕に之に遠慮し爲に自然窮窟に感ぜしむる如きも亦た孝心に厚き孝子の情に於て忍びざる所あり故に親子居を別にするは即ち雙方の情を重んじて永久に親愛の羈を固くするの秘訣なり孔夫子にして若し十九世紀の文明世界に生れば必ずや亦た此の族制を賛成あるべしと思はる。

然るに親子別居の事を實行せんとよは先づ親子の同居を必要としたる諸ろの事情を打ち破らざる可からず然からずば何如程に此の改良策を賛成する者と雖ども勢に於て亦た之を實行するとを得ざる也、抑も封建不自由の世の中に於ては君臣の義理嚴密にして家來の人數に確乎ある定めありたれば一家を作るも一家を滅するも素容易の事にあらず左れば家督相續の權長子に傳はりて長子其家を繼ぐときは親は隱居して其の子の厄介に罹り則ち其の家名に附屬する所の祿扶持を以て共に親子の口を糊すべきの定めなりき此に於てか隱居と云へる事第一に必要となりて次に家名相續と云へると第二の必要とあり自然の勢ひとして親子同居し數偶一家に合宿するの止を得ざるとにてありき封建の世に於ては此れ實に致し方なきものと雖ども當今自由の明治政府の下に於ては實際に於て亦此の如き必要あるを見ず親は死するまで何屋の何兵衛と名乘て一軒の主人たるべし子は勝手に別居して同時に一軒の新家を建るか或は只だ其住居を別にして親百年の後ち戶籍帳に相續の屆を爲さば萬事之にて畢れり最早其他に一つも面倒なるとなきが故に彼の隱居を早くし家督相續を早くし則ち以つて壯年の年寄若年の主人相ひ同居するとを必要とするの必要も亦た消滅したり。然るに實際の必要は既に廿年前に消滅して年來の習慣は方今に至るも尙ほ立去らず彷徨として天保出生老人

の頭惱中に住居し隱居の癖今に至つて倘ほ止まざるは尤も歎ずべきもの也、蓋し今の親は其子二十年に達するときは早も其嫁に心配し方々に口を掛けて似合しき縁談を覓め一日も速かに之が身を固めさせて早く安心したしと云ふ其意新夫婦の心掛によつて老年の行先を安穩にしたしと希ふもの也然るに今の息子も亦た多くは獨立心の少なきものなるが故に如此くして親の厄介たるが間にだも縁談を親の命のまゝにして敢へて嫁を娶ることを拒まず未だ獨立生計の方を得ずして早くも妻を迎へ子を擧ぐるを以て大丈夫の恥辱と爲さず所謂るスチカヂりの身分にして既に父と呼ばるゝを甘んずるが故に假令ひ親子別居の和樂に宜きことを知ると雖ども悲ひ哉其實際には斷然之を施行することを得ざるの不都合あり甚だ憫れむべきの愚を爲すものと云ふべき也。故に親子別居の方を實行するに當つては先づ隱居早婚の兩弊を除かざる可らず最初に斯の如き惡習慣を絕ちたるの後にあらずんば迚も親子各箇に家を設けて別々に生計を立つるの運びに至るまじきなり蓋し開化日進の世に於ては吾々棺に入る其時に至る迄では一刻だも安んじて隱居隱遁するの暇まある可らず白髮の老宰相と雖ども今倘ほ全歐洲を聳動するの政權を握れば況んや只だ其口を糊し其老を養ふ程の覺悟は今の老人に必らず無てはある可らず天保の生れと雖ども身すでに明治の人間たらば須らく常に養老金を貯へて死する迄で忰の厄介と爲らざるの覺悟あるべし是れ當今の老人の當に心得べきこと也而して今の少年の如きは凡そ立身して一個の人間となり其收入すでに能く其妻を安んじ子を敎育し且つ臨時必要の入費を拂ふに足るに至らずんば必らず婚すべからず今の米國大統領は大統領と爲つて而して後に婚せり古へのピットは兼て大望の成就を切願して容易に婚せず既に大宰相と爲れり而も倘ほ婚するに至らずして死しぬ何如に文久の生れと雖ども身すでに明治の少年たらば當に大丈夫の愧を知つて能く獨立獨行の榮譽を重んじ凡そ一家生計の方法を確立したるの後ちにあらずんば決して妻を迎ふべからず是れ當今の少年の亦當に心得べきこと也當今の老人及び少年若し如此く覺悟して一方に隱居なく一方に早婚なくんば親子別居の策則はち行はるゝを得て家族團欒の大計則はち實行せらるゝを得べし。

要するに之を遠くしては親子別居の大計行はれ之を近くしては家族銘々の心得行れ大小前後の改良策共に其功を奏せば日本の家族則ち玆に幸福なるホームと爲り一家の團欒和樂して

雍々の氣全國一千萬の戶々に充滿し東洋の一方に馥郁たる和氣を現出するに至らんと必せり樂ひ哉樂ひ哉大和の號則ち初めて萬國に轟きわたるを得べし。然りと雖ども如此き大小前後の改良策既に立つと雖ども若し玆に一事を欠かば則はち全たく功なきとなり之を喩ふるに猶ほ佛像を建立して之に精靈を得ず妙書既に成て眼睛の未だ點せられざる如し萬方殆んど空に歸すると云ふべし曰く婦女子にして若し家族を幸福にするの力なくんば則はち萬の改良方殆んど空に歸すべき也。

論説

○小兒の精神及び保護法　榊俶述　佃與次郎筆記

左は一月廿二日大日本婦人衛生會にての演述なり。

今日私は小兒の精神及保護法と云ふ問題で御話しますが一寸前置をしなければならぬ事が有ります此會は婦人衛生會と云ふて御婦人方の衛生のことに就て演説があるのですが私の申すのは御婦人方は取除けて御子樣方のことに就て述るのですからお門違ひの樣ではありますが然し能く考て見ますれば只今の所で日本でも西洋でも御婦人方は内を守り男は外を務るが一般であります乃ち内を守るとしても其御職務は會計上のこと衣服のことなどだけでなくして最も重なるものは小兒を育てることであらふと思ひ升ソレ故直接に御婦人の衛生には關係がありませんが能く考れば廻り廻って小兒の育て方を知らぬと衛生に關係することが起り升故に私は妙な問題で御話致し升が自分では決して無益なことは思って居りません。

一躰小兒の一番初めの心持と云ふものは何うかと云ふことを知らなければならぬ其一番初め卽ち母君の御腹の内に在る時は其赤子に心があるか無かと云ふことは分りません胎内に居ります頃は如何にも身躰の運動をなして手を伸し足を伸すことは皆母君達の御承知のことであります此動くと云ふが全く自分の望みであるか或は又外から壓される爲めに仕方なく動くのか是れは學者が多勢集て調べても分りません其時分に魂が有るか無か確かに定めることは出きませんソレから赤子が生れる時には必ず大きな聲をしてオギャー〳〵と言ひます此泣くのは自分の氣に入らぬから泣くのか落着て居るのが厭で泣くのかと云ふに是も分らぬが多分氣に向かないで泣き動くのであらふとのことです其證據は生れたての赤子にお乳を上げれば餘念なく息もせずに飲み之を取れば泣出ますマクリを飲ませれば

妙な味がするから苦い顔をします是れと云ふものは自然赤子の心に合はないことが分ります之を學問上に言へばチト六ケ敷が子供が生れると直ぐに善悪を區別する所の力があると云ひます併しながら其力が精神に在ると云ひましても私共の如く育ちし精神とは違ふので子供は知らず識らずに魂があるのです之を譬へて見れば恰好(下等のお話しですが)手は蚤が食ひますと痒いと云ふことが知れるや否や手が出ます此手は何時出て掻くかは知れません知らずに手が出ます如此働が子供に在り升前に申し升た乳を飲むのは即ち其一例で有り升是を無神識と申し生れたての赤子に多くあります。

其れより五日或は十日十五日間を經れば感じが大層に強うあります此時になれば最早自分の心持に於て善悪と云ふことが慥に分ります若し二週間後の赤子に濕れたオシメをさせれば赤子はオギヤア／＼と始めます暖めたオシメなら泣きません此所から見れば心持の好と非とが分るに相違ないです此時は丁度人間が外から受る所のものを皆心の中に知る樣になります其中にも皮膚は身躰の上を包むばかりでなく同時に熱い寒いも分ります耳をふさぎ目を眠つても手で探り見て是れはコップとか是は堅きものとか知れますが赤子は即ち足でオシメの濕れたのが分ります又續いて舌で味を知るに至ります是れは醫家は味感と申します乳を上れば歡んで飲み唐辛を上れば口をしかめて泣き出し次第に旨きものと否との區別が出ます始めは皮膚で知り次は味で知ります。

其れから後は大概二ケ月乃至三ケ月を經れば目が大層に利きます目は五官の一であるが御承知の通り赤子を懷抱して居れば目は只明たきりで人形を持て來ても知らん顔をして居ますが二ケ月か三ケ月になると人形を踊らせれば目を彼地此地にやり顔を回して物を見る樣になります目の働きの強くなつた所で始めて物を見やうと云ふ慾が出たのです其時と同じく耳の方も強くあり初めは歌をうたつても音樂をしても口笛しても知らん顔をして居たのが今般は物音を聞くに至ります坊ちやん赤ちやんと言て手を叩けば後を向き音樂をすれば其の方を顧みます是れが耳の發育する一番の初めで其頃は少しも考へなしに只妙な音がするから見樣と云ふだけで誰が音を出すか又人形を見ても面白き物と云ふ感じは無くして只動くから見樣と云ふに止ります而して半年位を經れば最う母君が分ります赤子なか／＼贅澤になつて他人にはだつこしない私の樣な髭だらけの者はふり向もしませんが母君とか乳母とかゞ「坊

や出て」と云て手を出せば直ぐに行きます此時ハ最早物をわける區別するの力が發達して來たのです何でも見やうと云ふのでハ無く母君ハ見様が他の者を見ないと云ふ心が出て來たのです即ち五官の働きが强く細かになり升た。

然して今までの所を一所にして御話すれば渾て人間の精神人間の心と云ふものハ初めはあるのでハない眞暗黒で何も無いのだが外部から色々頭の中に這入て然る後に人間の精神と云ふものが出きるのですソレデ有りますから若し今の外から這入て來るものが無いか或は又外から這入て來ても受付る所の道具なる五官が缺けて居るならば大變に精神の不具を起します例を擧げて申せば生れつきの盲目と云ふ極めて可愛想な子供があり升生れて直ぐ兩方の目が盲となつたから味を聞くと觸ると臭ぐとだけで見ると云ふことハ一切に出きませぬ既に見ると云ふ一點が欠けて居れば兩方の目のある者に比して發育の遲きハ云ふまでもなきことです而して最も甚だしきハ耳です若し生來の聾ならば生涯言葉を習ふことハ出きません始めて言葉を聞て覺る耳が缺けて居れば物を覺へることが出きませんから之を言ふことハ尚ほ出きません是れが啞です啞と云ふものハ舌がまわらぬのですがもと分らぬから言ひ様はありません私が今支那人のキヤン／＼云ふを聞て其眞似をしやうと思ても出きません其の出きぬのハ分らぬからです啞も其通り耳が聞へないから我から勝手次第の言葉を出すことハ出きません大變に心持が惡るいとか又痛くてもたゞギヤーと云ふばかりで言葉と云ふものハ一つも出きません實に可愛想なものです。

其れは不具者のお話しですが赤子の丈夫に生れた者ハ今申した通り五官から段々に精神が發育し五官の育つに從て子供は好んで稽古をします大人は先生に問ふとか友達に聞くとかしますが赤子ハ然うでありません先生なしに覺へますとハ實に大人は及びません勿論早い人も遲い人もありますが大抵八ケ月位で母君の膝の上に居るを見れば頻りに母君の顔を見詰めて居て知らず識らず眞似を始めます其内に容易く言葉が出來て舌も唇も使わずに出る言葉から習ひ始め一番には先づア、と云ひますイは少し六ケしい樣であります是れは西洋の赤子も日本の赤子も同じことで私が獨逸に少し居りました頃其下宿屋の赤子が三歳になるまで氣を注けて居りましたが一番初めは必ずアの字で次はアの字に通ふ音が出ます日本ならアの次がカア／＼とかワン／＼とか皆なアに通ふ音です西洋でも英吉利や佛蘭西ハ知りませんが獨逸ではマヽー／＼と云ひます

是れは母君と云ふとです少し後になつて言葉が出きて來ると
ハッ　ハーと云ふ是れは父君と云ふとです斯く簡易なとから習
ひはじめますが子供には一向に其理解は分りません丁度鸚鵡
の話をすると同じとでおります淺草の奥山に行て見れば分り
ますがオタケサンとかバカとか言ふと鸚鵡が其通りに言ひま
す子供も其通りで斯う云ふ時は此うと云ふとは知りませんが
只まねをします御子樣方を御育てなすつた方は能く御存じで
すが夕方散歩でもすれば赤子は晝の中何時覺へたかアヽとか
マア〳〵とか先生なしに覺へたとばを忘れてはならぬと思て
一生懸命に暗誦して居ります若し此時アヽとかカアとかハア
とか云ふ言葉を發ゆれば其御子さんの顔は實に鋭き眼をして
居るとは驚くほどでおります其するとき眼は丁度私共育ち上
ッたものゝ本を讀み手紙を書く時と同じ眼でおります而して
何を見て居るかと云に口の動く所を一番よく見て居りますも
し口を閉づれば眼を見て居ますが口の動き方は如何のものか
と知らず識らず眞似をしやうとの心持です中には試に指を口
に入れてアアと云ふうちに御手が這入るので何う云ふものか
妙なものだと探るのでおりますが此等は實に大人も及ばぬ程
の心が有るのです。（未完）

批評

○浮雲第二編の褒貶（其二）　忍月居士

第三、浮雲は能く運命を解釋せり　運命とは何ぞや曰く都て人の意思と氣質とに出づる行爲の結果にして禍に罹るも福を招くも一々其の人の行爲之が因をなすもの也著者は運命を此解釋に由ッて筆を立てし故其動力と反動力との窮所を描きて一點の非難す可きなし彼の數多の著者の如く運命を以て天の命する所人力の得て如何ともする能はざるが如くに解釋するか或は西班牙學者の如く運命を一種の怪異となすが如きは即ち人物を以て運命の一玩器と做し木偶雛人形と一般ならしめ讀者の感情を惹起すと能はず是れ馬琴爲永等の著作が其達筆あるにも係らず經驗あるにも係らず又脚色の奇巧あるにも係らず其欠點非難多き所以なり之を反言すれば即ち浮雲が無類拔群近世の一大傑作たる褒譽を專有する所以なり。

第四、浮雲の材料とせる人物は選定其宜しきを得たり、語を反へて言へば至善に非らず至惡に非らず外物の刺劇、耳目の誘導に就り或は善に趨き或は惡に染或は高尙に移り或は卑猥に化し自己の情慾に克つ能はざるの人物を選びしは浮雲著者が達眼なる所以なり之を以て能く人情の眞味を穿つを得たり

美術の微妙を顯すを得たり又讀者をして反復猛省膾炙の情に切ならしむるを得たり、凡俗汚情を洗滌し去つて光輝を發せしむるを得たり若し著者が極惡非道の人物を寫せしとせんか決して讀者をして同感（シンパチー）を起さしむると能はざるなり之に反して失德失行なき高傑優美の人物を載せしとせんか冷淡無味素豆腐を肴に淸水を飮が如きを奈何せん之決して小說家の取らざる所也予ハ幾重にも著者が人物選定の達眼あるに敬服せずんバあらず（此段第一篇の批評を參考せよ）。

之れを要するに浮雲ハ眞小說中の眞小說一言一句と雖も是を咀嚼する時ハ無限の味あり浮雲を讀む者輕々に看過する勿れ今其中に就て「浮雲一行値千金、紙有爛光筆有音」とも稱すべき絕妙なる句を摘擧せんに十二頁に「强ち昇の言事が可笑しいからでハなく默つてゐても自然と可笑しいからそれで笑ふので」云々二十九頁に「ト昇は歎息したお勢ハ眼を地上に注いで默然として一語をも吐かなかつた」云々九十頁に「暫く默然として何歟考へてゐたがまた思出し笑をしてホントに失敬な人だよ」云々百十頁に「ハヽヽヽヽお勢さんが心配する、シカシ眞に然うだモウ罷した方が宜い、内海笑ッて仕舞はう」云々及び百十二頁に「椽側でお鍋に戲れて高笑をしたかと思ふ間もなく忽ち部屋の方で低聲に試吟をする聲が聞えた」云々等の如きハ通常現出するの事柄にして通常見聞し而かも其一事を以て其人全躰の性質を伺ひ得べきの善き寶なるも人之を記憶に存せず人之を口に言ふ能はず著者ハ人の塵芥中に棄てたる此寶を拾ふて浮雲に利用せしハ著者專賣の一本鎗著者特有の得手藝と謂つ可し。

題して浮雲の褒貶と云ふ然らば之を褒すると共に亦た之を貶す可き也然れども余ハ浮雲に就て貶す可き點を發見し得ざるを奈何せん余ハ第一篇を批評せし時に當り强いて其疵を求め穴を探り針程の事を棒程に吹調せしを以つて殘忍ある批評家との誹を受けたり予ハ再び此の誹を招くを欲せずと雖も只褒稱するのみにてハ曲庇强護の疑を受けん否らざれバ或ハ鼻藥でも握つた樣に怪まれん余はいたくない腹を探らるゝのハ極〳〵の大嫌なれば不得已强いて一二の瑕瑾をほじくり强いて之れを揭げんと欲す讀者幸に以上に陳べたる所ハ溢美に非らざるも以下に陳ぶる所は難きを責むる者と思召す可し。

○谷間の姫百合　（末松謙澄二宮熊二郎兩氏合譯）

此書は前年英米にて評判ありたる艶麗の作物語ドラソルンを譯述したる小說なり此度出版に成たる第一卷ハ則はち其一部

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

分にして夏雲やうやく霽れたるの朝た將に定めなき一轉變の起り來らんとする尤も讀者を惱殺するの段落に筆を止めたり此書の結構面白味に付ては既に定評あり今は只だ譯文の是非に付て一言するの間隙あるとなるが此の譯文も亦た甚ハだ宜しきを得て先づは申分なき上出來の筆なりと感服せざる可らず其中にも吾人が尤も感服する所ろは長々しき一篇を簡潔なる短篇の中に縮めくど／＼しき長談話をアッサリとしたる數回の掛合の中に凝め乍ら能くも斯く西洋風の感想をバ現ハされたりと云ふと也凡そ今の譯文殊に今の西洋小說の譯文には只だ流暢とか穩當とか云へるとを專一とし彼原文の神髓たる口言ひがたきの感想をバ現ハし出さんとするものあし好し之れありとも之を能く現ハし得たるは少し然るに此書の如く斯迄に此の目的を達したるは多く見ざる所ろと感服する也。

但し斯る立派なる目的を達し得る譯述者は第一よ英語に達するもの第二に西國の人情に精きもの第三に文才あるものにあらずんバ能ハず而して此書の譯者は能く此の三資格を兼ねたるものゝ如くあれば吾人は更らに之に重きを負ハせて勝手に望む所ろを述べ少さか感服せざる條々を申さんには、

先づ「すいて居る」「何となく」の如き文字が餘り度々舞臺に立廻ハりて之れこそ何んとなく好かざる心地す元來好くと云へる語はラブと云へる文字に當るに足らず何とあくとは尤も卑怯なる文學者の用ゆる文字と思ハるゝに付少と此等は末松君に不相應の所ろならん亦た第三十七頁に、

其方の名は虎…可愛らしひ名だチー本統に好く其方に似合つて居る名丈でも可愛らしひ。

テニソンの名吟を朝々暮々に暗誦せざる日本人には虎と云ふ名前は甚だ恐しひ考へを持來らするもので之が可愛らしひ名だとは思ハれず又之に好く似合た女が即ち窈窕たる佳人であるとは何も思ハれません吾人茲に至て噴飯して笑ひ出せり此處らは美術を知る紳士にちと不相應の所にてはあるまじき乎。

又第七十六頁に淑雅貞美の有洲伯爵夫人が御門番の捨藏の家に行て虎女に物語る一段、

虎私しが今日茲に來た譯は云ハあいでも知つて居るだらう實は成人が其方と心やすくあつた樣に話をきたから其れを止める爲めに態々出て來たのだ。

之は何うか伯爵の御身分の語バ付とも思へあいのみか何分女性奥方の御物いひとは考へられません。

然し右二三の不感服を除けバ其外は尤も熱心に此小說の譯述

の立派なるに感服するものなり特に趣向宜しく道感あつく文章平易に分り易し近來の小說本中姉妹等が愼しみに一讀ありて然るべきものと信ず。

○婦人敎會雜誌

女學社會に近頃の尤も注意すべき一事は佛界に女權論の隆んと爲り來れると也之は前號にも數回申置たるとなるが今度婦人敎會に於て其雜誌印行の運びとあり去月廿二日其第一號を出版せられたるぞ則ち公けに向ひての佛敎女學大變革の一時限と認め大に喜ぶべき所ろあるべし。右雜誌には之と云ふ議論もあくして反つて何々大師の傳紀とか古くさき禮式の講釋などあれども右は初號あるが故ならん吾人は此雜誌の大に勢力を得て佛界の大燈明となり所云る坊守の女性方を顯光の世の中に導き出さんとを尤も希望する者也。

(61)　結婚の枝折　(中本一册(百四十六頁)定價四十錢　發兌所東京本町三丁目原亮三郞)

此書は米人ヒルドレッス氏の書を江口高達氏が譯述せられたるものにて一名を配偶の擇びと云ふ結婚すまじき條々四十餘則を擧げられたれども例へばアホウと婚姻す可らずとか大統領と緣組すべしとか云へる類にて左程斬新の名工夫は見へず特に之々とは結婚する勿れと云へる事甚だ細密なれども云々の人と結婚すべしと云ふ積極の敎は見へず凡そ結婚の枝折には合性の觀定方愛情の眞僞判定の方などが尤も大切の箇條の處ろ此類の說明の見へざるは尤も遺憾なり。

○以良都女と女學雜誌　(國民之友第十七號批評)

婦人敎育の事と云へば、縫針、琴三味線、手習、挿花、茶の湯の外に出でざりし古へに比すれば、今日の如く婦人に關する專門の雜誌出で來りたるは、誠に我婦人の地位の幾分か社會に重さを爲すの兆候にして、誠に賀すべきの至りなり、扨て此の婦人に關する雜誌の多くの中にて、吾人が最も目に付くものは、女學雜誌と以良都女なり、女學雜誌は、數年を經過したる老功の雜誌にして以良都女は、未だ妙齡なる新進者なり、二者各其特別の性質を有す、女學雜誌は、其社說に於て論する所のもの、皆一定の主義を有し、自から雜誌の全面に顯はるゝ所のものも、一貫したる理想を以て貫けり、よし此雜誌は非凡秀逸の大觀なきも、確然として動かすべからざる根底を有し、殊に日本婦人の最も不長所なる、日本婦人敎育家の最も不注意なる精神的、道德の事に至つては、最とも其得意とする所にして、殊に近來「日本の家族」と題せる社說の如きは、誠に何人も之を讀んで感心せざるものあらざるべし」以良都女の主とする所何の點に在るを知らず、然れども吾人が一讀して感ずる所は、其小說、其批評、其美術上、文藝上、裝飾上の記事に在り、蓋し此の雜誌は、婦人に相應なる美妙の感情を養ひ、世の婦人をして優美淸楚なる資格を養しなわしむるには誠に適當なるものと云ふべし、槪して之れを論ずれば、女學雜誌は、何となく重くろくして、以良都女は、何となく輕妙なり、二者の長處玆に在り、短處或へ又玆に在らん

叢話

○萬國婦人禁酒會員の請願

彼の萬國婦人禁酒會員は各國の政府に禁酒令の發布あらんとを請願するを一つの目的と爲す而して其請願書の末には萬國の同志の婦人の名を署するゆえに例とへば日本の婦人禁酒會

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よりも此の請願書差出の事に同盟して其趣を該會の本部に通知すれば我日本國政府に差出す願書の末には現今の日本婦人禁酒會員の名前を一々に記すのみか彼のブライト夫人もウイルラード嬢も彼のレビット夫人も其外數十万の同志の人々の名をあり〱と明記するの都合あり而して其代りとしては支那へ差出す願書にも又た英國女王陛下へ差出す願書にも尙ほ米國合衆國大統領の許に差出す願書に至る迄も皆な日本の禁酒會員の名前を一々に明記せらるゝものと知るべし必竟するに万國の婦人禁酒會員が同樣の主意を各國の國語に認め同時同刻に其國々の政府へ差出し惣會全躰の共同力を以て一齊に禁酒の目的を達せんとするに在るとあり。之に就て此頃ろ米國ウイルラルド嬢の許より東京婦人矯風會へ向け其由の通知あり若し同意とあらば則ち署名捺印したる會員の姓名を報知せらるべきよう申越されたるよし定めて諾否の回答を近くに送らるべきものと信ずるが故に此際右の一事に對する吾人の卑見を述べ置くと當然の事なり。

吾人の考へにては之に同盟すると未だ全くは宜しき處置とは思はれずと雖ども利害を權して慮ばかるに寧ろ之に加入するの利益多きが如く信ぜらる左に手短かに其利害を申せば、

第一　政府の法律を以て禁酒の目的を達せんとするは我日本國の如きに於ては決して正當の得策にあらず况んや之よりして俑を作り政府が徒らに干渉の政治を行ふ樣い事ありては宜しかるまじき事。

第二　然し到底は法律によつて酒を禁じ若くは制するの時代と爲るべし現今の日本の景勢を思合はせて考ふるに禁酒の請願を出し置くとも決して第一に申す如き心配は無之却つて次に申す四の利益あるべき事。

第三　即はち日本の婦人中斯迄に禁酒を望む者ありとの度合を政府と公衆とに知らしむる事、全世界中の婦人に斯迄で禁酒を希望する者ありとの大勢を政府と公衆とに知らしむる事、日本の婦人をして世界の有力なる婦人の仲間に入らしめ世界の婦人等をして日本の姉妹に同情を保たしむるを得べき事、最後に日本の禁酒會員もしくは之よ贊成の會員の勢力を發達せしめ得る事。

右の如く多少の掛念はあれども實際に於ては利益する所ろ多かるべきに付我が同志の姉妹等が斷然米國よりの申出に贊成して速かに請願書差出の仲間に入られんとを勸告す而して此際更らに注意すべき二つの事件あり、

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

東京婦人矯風會は矯風全躰を目的とし禁酒の如きハ只だ其一部分の望む所ろと爲せり故に會員中同志の人々のみ本件に賛成ありて然るべく決して矯風會全躰の一事業として加盟なくとも宜しかるべき事。

但し万國婦人禁酒會の列に入りたる他の日本婦人禁酒會は此際必らず之に加盟するか又は万國婦人禁酒會の仲間より離れて獨立せざる可らず何んとあれバ万國婦人禁酒會には禁酒令の發布を政府へ請願するとの一事既に確定したる會則と爲り居るが故也されば此際二つの中其一つに決せざれば道理相立ち申まじき事。

吾人の卑見斯の如し姉妹參考の一助と爲らバ幸甚。

○御身の務め

しのぶ錄

此頃の聖日にてありき集會の果たりし時愛妹まさ進み出でゝ申すようは過る夜不思議の夢を見侍りぬ偶と心を留めて見れば最と氣高き天女の妾はに現はれ玉ふて御身第百二十番の賛美歌を讀み玉へと命さるゝなり目さめて後ち常に所持する歌の本を取出でゝ彼の番を操反へして見るに Your Mission. と題したるは畧ぼ其義を心得て候へども扨て其の一節ごとに讀みもて行くに意の通ぜざる所ろ多く候あれ其旨を譯して敎へ賜れと云ふ此子素と學を好むとは云へど其の學びの年の短かければ歌の心の通ぜざるは宜べなるのみか第百二十番と定めて心付きたる由いと不思議の事あり此歌は未だ妹等と共に一度びだも歌ひたるとあけれ元來名高き吟咏にして道を傳ふる輩らの志を鼓舞するよ尋常ならず然るに今ま偶と之に思當れること中々よ假初めの緣にてはあらじ先づ其あらましを申さん聞たまへとて口づから譯したる其語バに、

きけよーゆのこゑ。〔けふゆかむたれぞ。野はーろくみのる。かりいるゝたれぞ〕。
ーゆのこゑたかく。たまものはおほー。たがいさみこたふ。〔われをやりてよと〕●
よーやうみこゑて。とほくゆかずとも。汝が戸のまへにも。救ふべきひとあり。
おほくぞあたゐね。わづかはめぐめよ。いさゝかのわざも。ーゆよろこび玉ふ●
よーくちはーぷり。天使保羅ならずも。ーゆうのあいとゐ。なんぢかたり得ん。
よーあく人のむね。つんざき得ずとも。ーゆうのみうでに。おさなきをひけよ●
シヲンのいわほに。ーかとたちあがり。天のみちかーこと。さーーめー得ずも。
ーづかにいのりー。わづかにめぐめよ。アーロンのごとく。手をさゝゆまでに●
萬みんーせんとー。ーゆのこゑたかー。〔爲すことのなーと〕。をこたりすなかれ。
をうせをよろこび。ーゆのみわざせよ。召さん日こたへよ。〔われをやりてよと〕●

と申すことあり此心は大凡そ道を信ずるもの丶何人にも用ゐることなり然れど御身には分きて此の奨めの適へるように覺ゆるぞかし御身表てに立ち出でゝ華美ある働らきを爲さんとは思ひ玉ふあ人知らぬ密やかなる室に入りて靜かにひざまづきて父に祈り玉へ又たそのやさしき手をもて同胞を導き更らに忍びて父母を導き淸よき愛心をもて身に近きが程を和らめ玉まへ左らば御身に主が命じ玉ふの務め畢んぬべし傍わらに

居る一妹に風琴を奏でしめ吾れ復び彼の歌を朗吟す樂は洋々たり涙潸々たり。

○生　死　（上）

晩鐘木梢にひゞき枯れたる木の葉ハラ〳〵として落つ余れ流水の頭りに立つて天を望めば暮色漸やく濃く風自から凄愴たり想ひ起す今朝早く起き心氣爽快にして志望甚はだ豪んなりき二六時忽焉として逝き端あく夕べに會ひ一恨一憂万事夢の如し人間の一生亦た蓋し斯の如き歟。

古來幾多の英雄ありき然れども彼等は皆な死したり古來幾多の大學者ありき然れども彼等も亦た死したり國色無双の美人も死し仁德高大の大聖人も亦死したり而して八百歳の彭祖と云へども八百歳にして死し三千年の東方朔も亦た三千年にして死しぬ現世の人それ誰れか亦た死なからん哉彼の權威さかむある御方より鹿鳴館の貴婦人に至るまで亦何れか死なからむ且や余れの父も母も同胞も百年の後ち遂に不幸を見ざるを得ず嗚呼余れ自身と雖ども亦た遂に死せざるを得ず。

人既に死すれば万事殆んど去る共に涙を垂れ共に心情をつんざきたる吾が愛思する所ろの人ありと雖も死するとき則ち之と離れざるを得ず或は憂ひ或は憤ほり或は憮然長歎して奮起經營し漸やくにして成功したる大事業なきにあらず然れども死するとき則ち之と離れざるを得ず氣息喘々將に絶せんとするとき吾が愛人も吾が富も吾が權力威望も遂に吾を引止むるあたはず吾等之を棄てゝ獨り暗黒塲裏に入る悲ひ哉。

あだし野の露の如く散じ鳥部山の烟の如く立去つて人間悉く死しぬ死すれば則ち肉直ちに腐れ骨乍ちまちにして化す盜跖も孔丘も耶蘇基督もイスカリチテの猶太も同じく皋れ塵芥にして皆な人の踏む所ろと爲る而て吾が今ま踏む所ろの土知らず是れ幾多の英雄豪傑の遺物ぞ思ふに全世界幾十億の民少きにあらず然れども其の足下には果して幾千億万の人骨化して土と爲れるを知らず。孩提高く泣いて生る、白髪の老翁珠數を戴いて死す、佳人才子桃樹の下に相笑つて談ず、薄命の伉儷相抱いて水に投ず、奢るものは久しからず夏の夜の夢の如し、猛き人も滅びぬ風前の燈びに似たり、嗚呼人世は猶ほ兒童が玩弄する廻燈籠の如きか曰く兵卒曰く美人曰く王侯將相曰く學者曰く騎馬武者或は躍り或は舞ひ或は走り或は飛び卒々として左に出で丶右に入る万事則ち畢る者也人世何の故に死あるか反轉して之を思へば生者必滅の常理を見のみ。

The Starry Heaven above, the moral law within.
Kant.

○百人一首一夕話（一）

鈴木弘恭講
八木鶴吉記

秋の田のかりほのいほのとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

さて此の御歌は。万葉集には作者不知といふ歌の中に出たり。然れば天智天皇の御製とも知られざれども、新古今集に始めて天智天皇と見えました。故にしばらく天皇の御製と致して置きましやう○かりほのいほのは。假り庵の庵のといふ事にて言を重ねていへるなり○あらみは。俗アラサニといふことなり○一首の意は。秋の田の假庵の其の庵の苫が荒さに。我が衣も露にぬれつぬれつ乾がぬとであるが。人民の辛勞はさぞあらむ。夫れを思へばいよ〳〵涙で袖が乾かぬことよとえ。一首の上より見れば莊園に下りて居たまへる時に詠給へる御製の樣であります。然らば皇子にてましますときに詠たまへるにや。此の一二の句十二字のうちに。のもじ四つありてうるさきやうでありますが。のもじは幾個重ありても指閊なき例であります。即ち此の御歌を證據とするがよろしいであります。語格は。我が衣手はと云へが指辭でありますから。露にぬれつゝといふつゝの結辭を以て結びたるにて。是を一段切の歌と云ので有ます。

○過去はなし（其三）　高橋おろか記

襲にも云へるが如く過去は帶紐みな前にて結びぬ是れその幅狹くして身を屈るに障りなきに因るか然るに少しく幅廣になるに從ひ前に結目あるは擧動ひに邪魔なるところより唯引廻して其端を狹むに至れり所謂つき込帶とは是れなり箕山が大かゞみに、つき込帶と云ふと昔はなかりつれど近代京より始まる帶さきを結ばずに折込となり是れ傾城に一段と取あひたるものなり結び込たるはかたし立居にしやらほどけして帶を引廻しながら座をたちたる躰おのづからにて風流なり云々又風流徒然草に、昔は帶のはゞもせまく胸高なりしゆゑ尻小く見え立に結び目もなくついはさみたるゆゑ取なりも細く丸く腰の平たきよね一人もなし云々これ徳川氏（五代綱吉公）以前の風俗にて昔々物語に、女中の帶みな金織の巾三寸長七尺五六寸あり又純子、繻珍の帶もみな同じ巾丈なり半下は木綿金入とて針妙腰元の帶とす長さは右に同じ寛文末よりはゞ廣になりて延寶のころいよ〳〵廣く純子三ッ割二ッ割などにて長さ一丈二三尺になりぬ云々今浪花鉦（延寶八年刊行）あげやの畫樣を見に茶屋女遊女とも前後に帶の結目を見ざれば是つき込帶の躰なるべし後ち天和、貞享の時に及びては帶地二ッ割にて仕立上六寸幅になりぬ實にこの年間においては容儀

の著しく變化たるときありき。夫れ此時にあたりて吉彌結と云へる結びかた流行せり西鶴大鑑(十八)に、東洞院の浮世紺屋の娘すがたのお春といへる名とりあり上村吉彌これをうつして一丈二尺の大はゞ帯くけめの角に鉛のしづをかけ世に吉彌むすびと始めて今にはやらしぬ云々また一代男(卅三歳の條)に、女帯を云ふところ帯は紫のつれ左まき結目後にくけめの角にあまりのしづを入れ云々結目後にと斷りたるは脇の方前の方などに結びたるゆゑなるべし一代女(三)に、後帯はきらびあれどもそれ／＼の風儀にかへて黄唐茶に刻み稲づまの中形帯云々また同書老母隱家といふ條に、むかし小袖に八重菊の鹿子紋ちらし大内菱の中はゞ帯前にむすび云々とあり凡て當時は帯幅ひろくなりし時にてつき込帯になしがたきより前に結びたりしが吉彌結の流行するに至りて其結目の大いなるにつき自然不便を覺ゆるを以て片脇より終に後にて結び始めたるが如し天和笑委集上野花見の條に、品となるたて染に一尺五寸の大振袖ゆき短く褄たかく當世やうの身せばに仕立二ッ三ッ四ッ重ね着て一ッ前に引合せ小づま揃へて着たるもあり腰に餘れる丹前帯うしろへきりゝと引廻し吉彌やうに結ぶもあり前にまはしてかるた結びにしけるもあり云々かるた結びとは歌舞伎事始に、四角に結びたるを云ふと出たり其他平十郎結び、路考結びなど、稱へて種々なる結方ありと雖ども一々云ふにも足らざれば其重要なる者のみを記しておほかたは畧しぬ。(未完)

小說

○小說神髓　(第一篇)

蘇格氏著ケ子ルヲルス　(第五回)

駈け行くトレッセリアンの跡に附いて彼の子僧も亦た走り來りしが森を一と周り廻りたるとき異様の裝ひして膝に皮の前掛を垂らし手に沓なほしの道具を持ちたるに出であへり扨ては此ぞウロン者ならめと睨らまゆるに彼方も亦た身構へして將に手向かはんとしたるが後ろより子僧が聲かけて紳士なれば用心せよと氣を付けたると何さま白刄を拔きて手に提さげ居るとを見て心臆し其儘默然として突立居る子僧は出さばり出でゝ此樣化けの皮が現れては致し方なし最早安心して旦那に談して仕舞へと云ふに彼の魔法遣ひと云へる沓なほしも商賣の秘訣を見破られて殘念よと怨めし氣にトレッセリアンを熟視し乍らヲヽ旦那は何處やらにてお見かけ申したりと

で之れより打くつろいで三人語物りける。段々と事情を問ふに此の異樣の男は名をエーランドと云ひ前年某と云ふ煉金術士に從ひて色々の奇藥の調合方を研究したるものなり然るに或る時其師匠なる人が急かに出で去りて復たと歸らず僅かに一封の書置を殘して敎ゆるようは吾れは思ひ立つとありて遠國に參る出立の砌り汝ぢに精しく申殘さゞりしが一つの殘念なれども今日迄で心を盡して敎へ置たる藝術も少からねば之より後ちは宜しく其術を施して生計を立つべし特に今一つの奇法をも敎へ置くべし即はち何々の藥を取り出し斯樣々々にして密と火にあぶり製するときは莫大の利益あるものを得べし之れぞ一つの置土產なれば宜しく試みて我寸志の程を知り玉ふべしなどありぬ、と物語るにトレッセリアン問ふよう然らば汝ぢ其を試みたりや、左樣直ちに試みんとは致したるが偶と考へ付けるは我師匠とせる人物は並尋常の者にあらず中々の惡人なれば容易に信じて油斷すべきとあらずと心得先づ彼の藥を取出でゝ僅かゞ其の少と計りを火に投じたるに果せる哉之は爆烈藥にて候ひき危ふひ哉之を以て私を燒き殺ろし其の素性を知るものを此世より除き去らんとの策略なりきと悟り候と云ふにトレッセリアンも愕然として聽き居たり、扨て右樣の次第にて其後は亦た藥調合も致さず左りとて世の中へ出づる便よりも無之一層かねて覺へ居る沓直しの術にて多少の暮しをいたさんとて即はち御覽の如く斯る地下に堀入れて造りたる此の土中の穴に住ひ致し之れなる子僧と慣れ合ひて村人等の迷ひに附込み最と不思議なる評判を立てゝ斯樣に沓なほしを營み多く金を貪ぼり取りて漸やく生計の助といたし候と云ふ此上は何卒旦那の御助けによりて世の中へ出でたし何如ようにも働らき申すべければ御遣ひ下さるようと連りに懇願するにぞトレッセリアンも遂に之を許し則ち之を伴なひて都に上る彼の子僧は殘り惜し氣に暇ごひしたるが二人の出でゝ行く跡に止まりて其處等の藥を覓め出し最前きゝかぢりたるとの不思議さに面白半分ちよと火を着くれば轟然として破裂し火烟迸ばしりて見る〳〵彼のかくれ家を燒きたりける。

トレッセリアンはエーランドを連れて都に上り先づラブサートの老人の許を訪へば此頃は病氣餘程危篤なるようなり令孃の行衞尙ほ分り申さずと話すも甚はだ氣の毒なりしが先づ其の巡歷の程を話して之を慰め且つ多少の手がかりもありたれば追て御安心せしむる便りの候べし附ては一つ公けに訴ふる

事の候につき何卒老父の御名と御印とを貸し玉へと申し既に其用意も調ひたれバ早や出立せんとするとき急飛脚突然にも到着しサッセックス侯よりの急の御用ありとて差出す其文の大意によれバ侯は近來常に不快がちにて此頃は特に不思議の病症あり尚ほ健やかなる中に成るべく親戚のものどもを召び集めて申し置きたき儀ありかたく／＼トレッセリアンは他にも越えて力と頼むものなれバ早々に參り吳れよとある實に哀れある書ざまなりエーランド傍らに在りて連りに首をかたむけ偶と思付きたる樣にて飛脚に問へるようは殿の御樣躰は若しや斯々にて食事ゆえもなく進まず御氣分何んとなく引立たざる云々の不思議なる御有樣にては候ハずやと云ふに飛脚は打驚きたる樣にて之は又々一つの不思議なる哉御前の御病躰寸分も今仰せらるゝ所に違ハずと云ふにエーランドはハタと手を拍ち左樣ならば私が之をお直をし申すべし何の難きとや候ハんと云ふにトレッセリアンは奇しみ乍らエーランド何を申す事にもよれ侯の御躰は當今女王の寵抜群にして全國に二つとなき尊き御身分あるを左な輕々しく汝等の藥の試み者となさるべくやと叱るにエーランド敢て逆らハず然し之は兼て心得る所に符合いたせば私も共に參上して一應の診察を申上たし是非御連れ下さるようにとて則ちトレッセリアンに隨ひ直樣出立してデプトフホードに向ひ發足したり。

佳傳

○ハーリート、ビーチヤア、ストー Harriet Beecher Stowe.

出板漸く成りて未だ半年を經ざるに單に米國のみにても既に十五萬冊を賣り盡し數年ならずして其賣高五十萬冊以上に及び一千八百五十二年五月ロンドン第一の出板ハ直ちに欠乏を告げて其九月に再板し日に一萬冊を出板して四周間二十八日に亙り一ケ月にして二萬五千の賣高をなせしも倘足らざるの感あり其年の暮スペーン語イタリー語フランス語デンマーク語スエイデン語オランダ語ジヨルマン語ポリシヤ語は勿論歐洲全土の國語に飜譯し普く世界に行ハれ文學社會に稱揚られ少しく文味を解するの徒は皆これを藏るに至りしハ「アンクル、トム、ケービン」と名く小說也其書の世界に普及すると共に其名も亦普く聞えしは其著者ストー夫人也夫人名をハーリー、ビーチヤアと呼彼の說教者神學者として全天地に其名を轟かせし神學博士ライマン、ビーチヤアの娘にて一千八百十二年(七十六年前)六月十四日米國コンチクチカット州リッチ

フィルドに生る善良なる庭訓を受け小學に在るの日既に文才を以て聞こゆ年紀廿四にして教授ストー氏に嫁し時に出板の諸雑誌に投書抔致せしが未だ其名も顯はれず次で同じ文學の友にして有名なる人々と語ひ「セミコロン、クラップ」と名く文學會を結び專ら文學上に力を盡し一千八百卅八年に「オンクル、チン」を著し非常の喝采を博し著作家として後來の望を屬せらるゝに至れり然れば「ウエストルン、マガヂン」「ゴッテース、マガヂン」「メイフラワア」抔の諸雑誌は頻りと夫人の筆を請ふに至れり夫人常に奴隷を憐むの志深く機會あらん限り彼の輩が爲に慈善の業をなし來りしが今しもケントキーに至り身親しく黒奴と交り其憐むべく悲しむべきの有樣を見深く其性質を正して專ら奴隷法の殘酷なるを思ひ當り爲に患へ爲に嘆くの情愈切に積り積りて遂に「オンクル、トム、ケビン」の材料とはなりぬ然れば一千八百五十年奴隷解放の令を聞て嘉びし人の多き中にも蓋し夫人ハ其尤も喜びし一人なるべし。

扨て其「オンクル、トム」は一千八百五十一年の夏筆を起してナショナル、エラ、雑誌に掲載し其翌年の晩春まで續けし小說なりしが友人の勸に任せこれを纏めて一冊の書となし出板せしに直ちに一万圓の原稿料を得たり當時ストー氏は貧乏なる學者にて「此の如き巨額の金ハ未だ余か手に觸し事なし」とて喜びたる位なりしが次で諸國の言語に飜譯し俄かに世界に普及するに至れり抑もこの片々たる一小說而も纎手の筆に成る何に由て斯も賞揚せらるゝ歟昔し身に黄金の種を抱きながら嘆きて行しダビット王ハ手に巨萬の收獲を携へて歌ふて歸り來りたり今「患と悲とは心の關を擁し筆に顯ハす慘狀ハ其十分の一だにも盡さずと思へば筆取手も自由ならず只陰に願ふ所ハ彼の人達の幾分にても此の慘狀より遁れん事になん」(ストー君が其夫人の思を述べし言葉)と歎きて稿を起せしストー夫人ハ亦滿肩の獲を擔ふて歸りたりこれ一には其文の佳麗なるに因るとはいへ單に此の精神の中に含まるゝに因り彼のリッケン氏が評せる如く貴き目的を以て書れたる書物なればなり試に其書を取りて何所にてもよろし讀みて見よ其片々に顯はるゝ文章は皆虔敬の空氣を吸ひてキリスト教の精神を吐きしものにあらざるハなし聞く佛京パリスに於てハ此書を讀みて聖書を求むるの念を起し甚しきハオンクルトムの聖書とさへ呼ぶに至れり又ベルジチムに於ても頓に聖書の需要を增したりと云ふ然れば當時奴隷廢止の論は盛にして學識ある者名望ある者權威ある者囂々議論せし中にも獨り夫人ハ議論を用ひ

ず説法に依らず單に其現狀を畵き出して人情に訴へ以て好果を買ひしぞ道理ある一千八百五十二年病を養はん爲めイングランド、スコットランドを遍歴せしに至る所盛宴を開き大會を張り偏に夫人が文學上道德上に顯はせし功績を稱贊したり其形況及路次の記事は夫人が手づから物せし異天の日影と題する書に詳あり次でグスマル、スワアンプ物語を著はし其五十九年頃はアタランチック、モンスリーの記者となりミニスタア、スウインクを書き其六十二年頃はアグチス、チブ、セレントを出板し何宗敎新聞として世界に名高きニューヨーク、インデペンデントの記者となり又チルス、アイランドの眞珠と題する書を著わし何時々は他の雜誌新聞へも投書し專ら文學に力を盡したりしが一千八百六十四年ハートホルドに壯麗なる家を構へ家族和樂して春風融々の裡に在りて餘年を文學に送りしと云設如塚墓は苔に埋むるも世界文字の跡あらん限は夫人が名譽は永く世に傳べしこれを讀て其功を逐ひ其恩を擔ふ者は來りて夫人と志を同ふし以て其名と其志を續ぐべし盖し一枝の筆を以て世人の良心を皷舞し身は室房に隱れて夫に侍し兒を護り靜に雍々和樂するが間に以て世の大事業を成すもの恐らく夫人の行ひを學ぶより宜しきはなき也○

●寄書

○相撲甞風の汚稱速に脫却すべし　安西りき子

我國古へ神國の名あり今や名實相反し姦淫の空氣國内に充滿し將に其底止するところを知らざらんとす豈に慨歎の至りならずや

我相撲國の如き淫氣甚だ旺盛なるものゝ如く古來婦女亂邈の名あり然りと雖も妾未た其名のみにして果して其實ありや否やを知らず早晩必ず其汚稱を脫却するあらんことを庶幾するなり然るを頃日人の傳ふる所を聞くに轉た驚嘆に堪へざるものあり是に於てか果して其實あることを悲むなり

郡名の如きは名言するに忍びずと雖も我津久井郡を隔づる遠からざるの○○郡には言ふに忍びざるの名稱を稱する所の神佛ありて(或は色事地藏或は出合觀音)毎月某日を定め緣日となし鄕村の少年男女貧富貴賤を問はず夜間父母の認許を得(甚しきは父母より其子を强て爲さしむるものあり)其社内に至り男子は情婦のあるを誇とし女子は情郎の無きを恥とし以て木根を枕とし木葉を蓐となし而して淫慾を逞ふし其數を得る多きを以て豐年の吉瑞となすと嗚呼是れ實に言語に同絕するのことにあらずや今や人文開明の域に到達すると稱するところの我邦にして誰か此事あるを眞とせんや然りと雖も傳ふるところのものは皆朴訥直者の言決して言を設けて云ふものにあらざるなり而して是れ近鄕人の皆く稱道するところのもの妾は未だ目擊するところにあらずと雖も果して其實事たることを信憑するなり已に信なりとせば亦た慨嘆の至りならずや發俗の甚しき之に過ぐるものは非るべし神國の名稱を汚瀆する之に過ぐるものは非るべし是れ妾等が言ふことを欲せざるところのものなりと雖も亦た止を得ざればなり妾豈に言を好まんや

妾は今速に之を矯正せざるべからずと欲するに方り他に聡頴のあらざるなり其鄕村にあるところの敎育家其人に囑托せんと欲するなり敎育家諸君にして果して私利に奔走するとなく敎授と敎育とを誤認するとなき授業器械に非る其人ならば之が暗愚人民の頭腦をして少しく人文開明の何物たるを知るあらしめよ妾は實に希望に堪へざるなり若し然らざるときは相撲甞風の汚稱到底脫却すべからざる也

●新報

○婦人矯風會

去る四日の公論新報に矯風會の内幕と題し甚はだしき事をば記したり必竟何等かの間違を種として無雜作に書流されたるならんが苟くも社會改良を目的とするものは斯る事柄に筆を下すとき尤も用意周密なるを要す而して萬一にも實際に心配せらるゝ如き事のあらん折は須らく堂々と論じて毫末だも容謝する所ろなかるべきが新聞記者の覺悟なるべし、然し同新報には其后正誤ようの者の度々見へたれば最早や辨論する迄もなしたゞし向后成べく記者が注意の厚からんを祈るのみ

○中島俊子　湘烟女史は今日横濱へ移らるべし太田村に新築の住居も畧ぼ出來せり此上は家塾を開ひて女生を敎授し尙ほ日々山手百七十八番のフエリス女學校に和漢學を講ぜらるゝ筈而して新居は只一軒立にて此度新に途を作られたる程なれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ば俗塵至らずして風光窓外に美なり之れより餘暇の多かるべきに付自然女學雜誌上に其金玉の現はることも屡ばなるべしと樂しまる

○東京婦人矯風會　ハッイの安藤領事が禁酒の觴を出されたる事及び高知の植木枝盛氏發議にて妓樓禁止の請願を出されたる事は近來の二大美事なれば矯風會よりは右兩氏へ向け謝狀を送り且つ其獨よ道の爲に盡力あらんとを希望したり

○京濱女學校　曩に記したる哲女館は去一日開校せり。櫻井女學校ツルー夫人の發起にて近々看病婦養成と慈善主義傳道主義を兼たる施療との病院を開かるべし

。明治女學校は議員島田三郎氏洋行を送らん爲め去三日に送別會を開きぬ同氏不在中は殘る議員田口卯吉氏の外に湯淺二郎氏も亦た相應の補助を爲さるべき約の由。橫濱フエリス女學校はいよ〳〵新築に取かゝりたり

○寶冠章　同章は本年一月勅令第一號を以て制定せられ内外婦人の功勞あるものに下賜の筈なるとは其節掲載せしが賞勳局にては曾て其雛形の見本を提出する樣彫工會へ照會ありしに同會員なる加納夏雄海野守利池戸民國外三氏が協議を遂げ頃日漸く成功せしに付き去る廿八日雛形を提出せし由なるが今章は總金にて楕圓形の上下左右に櫻の花葉を飾りしものなりと聞く

○東京女工學會　今度京橋區三十間堀三丁目に設けし同學會は本月一日より授業を始めたり其教科は男女洋服及び和服裁縫を教授するの外に英、獨、佛三國語と編物とを教授するものにて生徒は年齡滿十四年以上の婦人に限さり概ね滿五ヶ月を以て卒業する規則にして裁縫に用ゆる服地諸器械等は一切該會に備付けあり束脩一圓月謝一圓五十錢(一科は一圓)半日生七十五錢又夜は束脩五十錢月謝七十五錢、會長は和氣靜子、幹事は鈴木よね子、教員はフエーヴイン夫人、植木彦八、熊勢鉚次郎、川島又五郎の諸氏にて此等の諸氏は築地縫音會員なりと云ふ

○高知の女況　高知の婦女子は今度矯風會なるものを設置せんとて奔走計畫中の由又基督教信徒の發起にて土佐郡中島町一丁目へ私立英和女學校を設立し其教師には曾てより同地へ滯留の米人ダード孃グリナン夫人を招聘せんとて既に出願せし由

○橫須賀の婦人矯風會　同會員は去る二日津田仙氏を東京より聘し同地中里村の基督教會堂にて禁酒演說會を開らけり津田氏の外數氏の演說あり夜は幻燈會を催し散會せしは午後十時過なりしと

○女子矯風會　德島高等女學校の校長岡本斯文氏は全地方の婦女子輩の昇屈無氣力にして且つ其風俗の甚だ宜しからざる所あるを以て之を矯正せん爲め今度女子矯風會なるものを組織せんとて周旋中なりと云ふ

○鳥取婦人會　鳥取にては同志の婦人結合して婦行を修め從來の陋習を去り女子教育の進步を圖るを以て目的とし每月一回開會して修身、女子家政學、家庭教育等の講習をなす由

○婦人風俗改良會　大坂府下の淑女が發起にて題名の如き會を設け去二月四日土佐堀青年會館にて談話會を開らき米人フイシヤー女外數名の演說ありしよし

○綜藝種智院　大坂府下眞言宗寶珠院佐伯覺燈氏が首唱にて同宗榮爵の賛成を得慈善主義を以て綜藝種智院なる學校を東備後町二丁目へ設立し婦人の教育を施す由にて去月一日其開校式を執行したり

○婦人を會す　福岡縣嘉麻、穗波郡長久野寂也氏が過般管下嘉野村にて婦人百餘名を同地の寺院に會合せしめ一己有志者の資格を以て家庭教育の必要を平易に談話されたるに皆な餘程感動せし樣なりとのことなるが實に美擧とこそ云ふべけれ

●海外女報

○日本皇后陛下　近來は彼地の雜誌に每々我皇后陛下の御事を記すとあるが去一月のグーデース、レデース、ブツクに云く日本の皇后陛下は西國の女風を輸入するとに殊の外御志を惱ませらるゝと承へるが華美なるハンカチーフを嘉みし玉ふて黃色の布に菊花を縫箔にしたるを用ひさせ玉ふとなり、元來ハンケチは御銘々の好みの色のを用ひ玉ふが例なれば葡萄牙の皇女の如きは淡石竹色を好み之に谷間の姫百合を縫込めらるゝ而して斯く色々の花を附くるに各御自身の好みの品を擇むとは全くパリーの風にてあり云々

○五十年祝祭の捧呈金　英國の婦人等が女王ビクトリア陛下即位五十年の祝祭に當り銘々一錢づゝ寄附するとの企に應じて差出したる女の數凡そ三百萬ありし由なるが其の金は一部分を以て故のコンソルト陛下(女王の御郎君)の肖像を作り參らし殘りは其儘にて捧呈したるに陛下は之を嘉納ありし上へ看護婦養成の學校へ向け之を下附せらるべき御意のよしに承はる

○三萬人の婦人の願書　アルステルの婦人三萬人は此頃英國女王陛下に願書を捧げ彼の愛兒蘭自治案を批准し玉へざるように請願したりと云ふ

○三つの懸賞文　ダグ子ーにて女學雜誌を出版するマリアホンレデライン夫人は下の如き三の問題を發して答文にそれ〳〵の賞金を與へんと廣告ありぬ一に云く妻若くは母が一家の生計を助くるが爲めに働くは家族の和樂に宜しき乎否や賞金百ルーブル(一ルーブルは七十五錢)也二に云く教育ある娘方に宜しき新職業賞金五十ルーブル也三に云く細君即ち家の主婦の仕事賞金亦た五十ルーブル也

○小供のはなし　（第五回）

○不思議の新衣裳　（上）

或る國の天子さまは大層美くしひ衣物がお好きで毎日〳〵化粧部屋に入つて半日は衣物を着換へたり何かして暮されたと申すとで夫故華美立派ある衣服とては山の如く在りましたが

まだ〳〵美しひものとあらば何れ程の金を出しても御買上に成るとの評判高くありました。左ればにや玆に二人の機織ありと申すもの朝廷に申上るようは私しども多年の修業により不思議なる織物を織ることを工夫いたし候其は眞に奇代の功德あるものにて凡そ世の中にて何事か一つ一つの仕事を保ち居らんものが若しも其仕事役目に適せずば彼の織物を見れども見へず又其の任に適ひたる人々には眞に立派此上なく見ゆる最と不思議の品に候惟ひ奉るに天皇陛下もと人を知るの御明鑑に富ませらるゝとは云へ倘ほ斯る衣裳を召して億兆を辨じ玉ふ叡想の煩はしさを少かにても省き玉はんには下々の喜び何如ほどにや候べきなど奏上したり、何がさて左なくだも斯る衣服とあらば万金を拋ちても求め玉ふの御氣性なれば直さま之に命じて速かに其の織物を織上げよと仰せらる。

二人は畏こまつて新たに織殿をしつらへ極上の絹糸若干黄金莫大を請ひ申して之は悉く其の懐中に着服し扨て機には何者をも置かず只だ空手を空にあやどりて日夜營々として織上ぐるなるべし。然るに數日立ちて天皇は心もとなく思召し總理大臣を呼びて申さるゝようは何如に某かの新機も最早餘程に捗取りつらん其の樣姿を吟味せんもの御身の外にはあるべからず御苦勞なれども彼所に參りて事の躰を視察ありたしとあり大臣は兼てより彼の織物に不思議の功德あるよし承わり居れど吾れ數十年國家の重きを負ふて此の榮職を荷ひ世を治め民を安んじたるに少かも怠れりとは思はず自から量かるに固より能く吾が職に適するものならんとて深く信ずるものから敢て疑ふとなく畏こまつて直樣彼の織殿に行て見るに二人は最と鄭寧に之を案内し扨て是程に織り上げ申しぬ模樣も思の外に美しく色合も斯く引立ち申しぬと一々に指ざしてしきりに指示すにより大臣さようか〳〵と云ひ乍ら機の上を見るに一物もなし鳴呼や吾れ不幸にして此の神妙の織物を見得るの明なきや吾れ今ま位人臣を極めて總理大臣とはあれど悲しひ哉才之に適せざるかと歎息し乍らも斯る事を人に知らするは智慧なき行なりと覺悟し靜かに目鏡を取出してチツト目つめ又あちらこちらを感心らしく打ながめ乍ら「之は立派だ」どうも之れは美くしひ」と心ろにもなき感歎詞を發し織手の功ら莫大なりと賞め置きてハウ〳〵の躰にて御殿へ歸り謹しみ愼しみて帝の御前へ出で限りなく新機の趣むきを賞贊し之れ然し乍ら聖德の致す所ろなりと言上して眞赤なウソを述たりける。

廣告

交詢案内

●雇いたき方（甲）

一 機織　府下にて十二三より以上の女を數百人機織に雇ひたし（神田紺屋町十一番地福原方）

●雇はれたき方（乙）

一 教師　師範學校女子部の卒業生にして府下の何方へか教授に行きたきものあり

二 書師　洋畫の女教師と爲り得るものあり廿才前後時間多からずば女學校の教師となりたし

三 奉公　年頃廿一、裁縫及び家庭の事を知るが爲め無月給にて府下にて可成基督信徒の家へ雇はれたきものあり漢學英學も少し出來るなり

交詢案内新設の事

女子に職業を與ふるとは當今甚いだ緊要と存じ候ところ世に在る慶安と云へるものには弊害尠らず又た高等の人々は周旋の便利すこしも無之甚はだ殘念と存ず因て吾社は此度餘暇を以て此等の人々の便利を圖り今後此の廣告欄内に交詢案内の一部を備え置き女子職業に就くの都合を計り度希望せり

交詢案内の規則

此案内は吾社員が餘暇を以て致すとゆえ手數料等は一切申受けざるは勿論なり左れば依賴の人々も決して催促がましきとを申越されざるよう豫め願置候事

女教員、うば、こしもと、奉公口、其外さま〴〵の女の職業に付き雇ひたしと思ふ人及び雇はれたしと思ふ人ともゝ其由を細かに申越さるべし吾社は之を次に記るす如き躰裁にして無名にしてたゞ番號を付し廣告すべき事

雇ひ主及び望み手は此の廣告を見て第何號の口へお世話ありたしなど勝手に申越さるべし左すれば吾社は其間に立ち双方へ申送り相談とゝのひたらば改めて此所に廣告して前の廣告を取消し尙ほ一つの女職の途を開きたるとを姉妹方と共に祝はふべき事

前申す如く手數料は一切要せざれども雇ひ主及び望み手の双方へ一應の問ひ合せと其後ち否やを返事するとにより少くとも三四回の郵便を出さずば相成まじ因て双方とも御依賴の初めに郵便切手拾錢を封入して賴み越されたき事。

交詢案内廣告の「ひながた」

●雇ひたき方（甲）

第一 教師　女の方にて年は何才位宅に來りて英學のリードル三位ひを敎へて下さる方はなき乎尤も賴み手は東京三番町住

第二 うば　去る一月生れの女の子のうば年は三十程にて正直なる人あらば雇ひたーし尤も賴み手は鹿兒島の櫻島にて

第三 下婢　田舍出の正直ものにて十五六の小女月給は一圓半位にて雇ひたーし尤も賴手は東京富士見町

第四 髮結　仙臺地方へいろ〳〵の束髮の結ひ方を敎へに來る女あらば雇ひたーし尤も給金は十圓にて二ヶ月程

第五 お針　正直な老女にて五十程の人お針に雇ひたーし尤も袴も仕立らるゝ人但ー雇ひ先は西京住の華族也

●雇はれたき方（乙）

第一 教員　ある女學校の卒業生十八才也毎日三時間ほど月給十圓以上にて英語英學の教授いたーたーし尤も東京にて

第二 學婢　學問篤志なれども學資なく〳〵て困窮する田舍出の十六の娘若ー讀書さへ出來れば安く奉公ーたーと云ふ

第三 字拾　是迄で或活版屋の字拾を爲せー十三の小女越後邊へ參りたき願あり新聞屋などにて需めはなきや

第四 下婢　年十四才なり正直のつもり越後生れきれうも小間遣ひには成れる夜具衣服一通り持參給料二圓にて願う

第五 編輯　英語英學は普通女學の卒業生ほど出來米國へ三年留學ーたり何か編輯著作上にて依賴されたき方は報爲

●喜びの惠み

第一 乙第一は去月甲第一と相談まとまりたり

第二 乙第二は甲第三の宅にて信切に引取り介抱す

京橋區日吉町八番地

女學雜誌社

中島湘烟女史著

●善惡の岐

定價金五拾錢
繪入 美本

●目次○野蠻とも言へ未開とも言へ實に太平の里なるべし○高島田にやの字の娘五分さかやきに無刀の浪士○紅潮端なく上る佳人の面○一樹の名花春動く初○豁間の清流も繁都の泥水なりしを知らずや○雙腕の勇餘す所なく滿腹の智遺す所なし○撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり○痴夢情烟春月暗○難知一滴愛情水散湧奔波激涙來○世上の功名灰塵に異ならず○錢嚢瘦腹裡飢以て天下の經濟を論ず○貧生の慷慨恃に足らず○當路の君子にして袖の下を嫌ふものはあらじ○双蝶花に戯れて春情あり○觀樂のある處悲愁の伏する處○姉妹の談濃かにして春窓の燭微かなり○怨もなく怒もなきは交りと愛と共に新なるによる○撫松庵が胸邊寒く吹き送る巖間の風ぞ腥し○世難海より深かく人情紙よりも薄すし○會離縁あり懸報爭ふべからず○優なる哉水聲人事の齷齪を嘲る○情人の艶話唯閑雲の聞くあるのみ○上帝親なく唯善人に與みす○客窓涙あり孝子の情○茲に因ありて茲に果あり○人間の歡樂一場の夢○墜葉翻て力なく懶禽啼て恨あり○地下の白骨土いまだ冷かならず病窓の美人恨愈多し○開花原是落花風○人の死する其の言ふとや善し

●賣捌○本社、銀座博聞社、原金港堂

統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序
通今居士横山雅男君著

●婚姻論

定價金三十五錢
郵稅十四錢

此の書は通今居士横山雅男君の著にして全編を二十八章に頒り總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

發兌			
一月。七日	十四日	廿一日	廿八日
二月。四日	十一日	十八日	廿五日
三月。三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
四月。七日	十四日	廿一日	廿八日

定價		
一册。五錢	郵稅。一錢	(但府內無郵稅)
十册。四十八錢	郵稅。十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢	府外は 一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行 一回 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
(廿七字詰)

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受くべし女學に關係ある書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町殷々堂 ○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂 ○同日本橋區新葭町巨明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂 ○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞 ○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂 ○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店 ○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助 ○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號 ○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂 ○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行人 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷 東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地 森田豐

逓信省認可